特集

未来へつなぐ 千町（せんじょう）の棚田

山の斜面にいくつもの田畑の石垣が残る、千町地区（旧加茂村）にある棚田。
日本一ともいわれる広さを誇る棚田でしたが、過疎・高齢化にともなって
現在は約８割が耕作放棄地です。棚田は全国的にも約40％以上が消えているといわれています。
2019年には、棚田を継承するために「棚田地域振興法」が施行されました。
棚田はどこか「懐かしい」と感じる日本の原風景であり、先人の知恵と努力が詰まった大切な財産。
これを未来につなごうと、棚田で汗を流す人々を訪ねました。

執念が生んだ千町の棚田

１５８５年に土佐の豪族「伊藤（東）近江守祐晴」により開拓。山の斜面に開墾された田畑が千町歩（約１０００ヘクタール）もあろうかと思われるほど広いところから名が付けられたといい、標高１５０ｍから５００ｍの間に広がっています。お米を作るために、一つ一つ山を削り、斜面に石を積み、水田を広げていきました。最盛期には約60ヘクタール、２５００枚の棚田が広がっていました。山腹の至るところに湧水があり、きれいな水と一日の寒暖差が大きいことで、お米のおいしさには定評があります。２０２２年には「つなぐ棚田遺産～ふるさとの誇りを未来へ～※」に選定されました。

※全国では２７１カ所。県内では５カ所

1955年ころの農作業の様子。牛にワクをひかせて田んぼをならし、手作業で田植えをしています【早田清美写真集「千町棚田 50 年」より】

千町の棚田の現状

耕作放棄地が約８割

耕作面積が60ヘクタールから約10ヘクタールに。耕作放棄地が増えると、草や放置竹林も増えます。棚田が機能しないと土砂災害につながったり、水源かん養の機能を失うことに。

千町地区の住民が激減

１９５０年ころは96世帯、約５００人いた住民も現在は９世帯、15人。水田を戻すには約２年かかるといわれています。傾斜地にある棚田は不便で一枚一枚の面積が小さく、労力が必要なため、過疎・高齢化に伴い、保全がますます困難に。

上の方は耕作放棄地。石垣が見えない状態に

千町の棚田へのアクセス

国道11号線加茂川橋交差点を国道194号線（そらやま街道）に入る。千町・藤之石本郷方面の表示板（写真下）が見える交差点を左折

棚田とは

山の斜面や谷間の傾斜地に階段状に作られた水田。１枚の水田の面積は狭く、これが規則正しく並び、山の斜面を覆います。

▶棚田の役割
①水源かん養
②国土保全
（土砂流出防止）
③生物多様性保護
④地球温暖化防止
⑤保健休養機能
⑥食糧生産機能
⑦里山景観

1975年ころの千町地区

千町の棚田は標高差350mの範囲に石積みの棚田が2,500枚！

棚田を守る理由（わけ）

千町の棚田で活動する団体の一つ、NPO法人うちぬき21プロジェクトの千町棚田チーム（以下、チーム）。棚田保全を目的に2018年から本格的に活動しています。その中心にいる、住民の山内隆彦さんと西条農業高校で教諭を務める成髙久豊さん。活動の原動力と思いとは。

故郷へUターン。みんなの憩いの場所に

ふるさとへ戻る決断

「18歳で『こんなとこいやだ』って出ていった」。高校まで千町地区で暮らし、卒業後はふるさとを離れ、県外で働いていた山内隆彦さん。地元を離れているうちに少しずつふるさとへの思いに変化が。「帰省を繰り返すうちに、千町への思いが徐々に変化し『この場所はやはり特別だ』と思い始めた」。千町の変わって行く姿に心痛める中、4年前に父の介護のために急遽帰ってくることに。「親父が貸していた土地とかで、成髙先生らが必死に作業している姿を見ていると、ここを潰すわけにはいけない、残るしかねえよな」と仕事を辞め45年間離れていたふるさとへ戻る決心をしました。

先人が残した特別な場所

最近では「千町を知る」きっかけにしてほしいと、自宅の隣に体験ハウス「RESET（リセット）」を開設。「田植えや草刈りだけじゃなく、ちょっと休める場所を作りたいなと思って、1年間かけて空き家を改築した。こののどかな雰囲気を体験し、『また来ます』という人が1人でも増えれば」と、今後はピザ窯や露天風呂なども作っていくそう。

今後の思いを聞くと、「自分の家から見えるこの石垣の風景が大好きなんだよ。昔、崩れているとこを直したことがあったんだけど、1枚直すにも半年かかった。それを昔の人は2500枚だなんて。やっぱりすげーなって。昔は米で家族を養うために、みんな必死にやっていた。その努力の結晶がこの石積み棚田に表れているよね。江戸時代みたいに食いつないでいく棚田はないけど、ふるさとへの思いと、先人たちの残したものをつなぐという責任感を持って、未来につなげたい」と笑顔で話してくれました。

▲8月には体験ハウス前で、関係者を集め、流しそうめんイベントを開催しました

山内 隆彦（たかひこ）さん

千町地区の住民。67歳。チームのメンバーとして活動するほか千町の棚田の魅力を知ってもらおうと今年10月から体験ハウスを開設。

「RESET（リセット）」の詳細は▶

思いをつなぎ、棚田を次世代へ

うちぬき21プロジェクトの千町棚田チームの目的は「棚田再生と自然災害に強いまちづくり」。
活動内容は農業生産活動として米の栽培や耕作放棄地の解消、景観保全活動として石垣保全や放置竹林の整備、そのほかライトアップイベントやうちぬきフェスティバルでのお米の販売、他地域への棚田保全団体との交流など

若者たちとここを一緒に守りたい

棚田との出会い

「ここが機能することで、西条の水と環境を守るんよ」。成髙久豊さんが千町の棚田と出会ったのは2006年。「当時の校長がテレビ番組の「DASH（ダッシュ）村」みたいにしようと言ったのが、活動の始まりなんよ」。当時西条農業高校では、学校行事の一環で毎月第一土曜日に生徒や市民が一体となって、千町で稲や草木を栽培していましたが、生徒数の減少などで活動が衰退。成髙さんも異動などで、一度は棚田から離れていましたが、再び西条農業高校へ。「戻ったときに、棚田のことがちょっと気になっていた。自分のふるさとによう似とるんよ。なんとかせないかんなあと思いました」。そこから保全活動を再開した成髙さん。平日の授業のほか休日も合わせ、週4回ペースで作業しています。

次の世代へつないでいく

保全活動はうちぬき21プロジェクトが主体的に行ってきましたが、メンバーも高齢化が進んでいます。「後世に残したい」そんな思いでできたのが、西条農業高校棚田チーム。成髙さんの指導のもと、生徒たちが活動しています。「最近は卒業生も来てくれて、後輩たちに教えてくれる。頼もしいね。将来農業したいという子もおるんで、ここで学び、自分の家の土地も守るし、千町も守ってもらうという風に理想を持ってね。僕がやりよるような活動を続けてもらいたい」と棚田継承への思いは誰よりも大きいものがあります。

「ここに来たら心が癒やされる。第二のふるさとやね。最近では地元住民の子どもさんや、お孫さんが草刈りを手伝ってくれた。元には絶対戻せんから、つなぐ棚田遺産に登録されとる範囲（約20ヘクタール）は石垣が見えるようするのが最大の目標です」と成髙さんは今後を見据えながら、今日も棚田で活動します。

▲生徒や卒業生と一緒に活動。次世代へ技術継承も

成髙 久豊（ひさとよ）さん

大洲市生まれ、市内在住。63歳。チームリーダー。3年前に教諭を退職し、現在は西条農業高校の再任用教諭として土木や環境を専門に授業を行う。チームのメンバーも募集中（TEL090－4504－2391）。

高校生も棚田で奮闘中！

3年前に成髙さんによって発足した西条農業高校「棚田チーム」。課題研究の一環として、今年は主に4人の生徒が活動しています。

南海放送でも特集！

南海放送「NEWS CH.4」では昨年から高校生たちの作業の様子を四半期ごとに放送。過去の放送動画は、Youtubeで公開中

課題と向き合う

「もともと水路や石垣などの農業土木に興味を持っていました。そこで石垣が形として残っている千町棚田で知識を深めようと思い、チームに入りました」と話すのは学校の農業クラブの会長も務める越智大心さん。「草や木が生い茂り、ひどかったですね」と現地を見たときの印象を振り返ります。

4人で本格的に活動し始めたのは3年生から。活動は「増え続ける耕作放棄地」と「繁殖する放置竹林」をどうするかという棚田の大きな課題と向き合うことから始まりました。「まずは放置竹林の位置を確認し、何十年か前の衛星写真と今の写真を比べて、どれだけ増えたかという調査から始めました」と髙橋幸晟さん。調査の結果、約40年間で3ヘクタール、約4％が放置竹林になっていることが判明。そこで放置竹林の整備を行い、伐採した竹は竹灯籠の制作に活用することにしました。「啓発活動のため、毎年2月にライトアップイベントを行っています。そこで使う竹灯篭の制作を行い、楽しみながら棚田を知ってもらいたい」と、8月には田野地区の盆踊り大会で子どもたちを対象に、竹灯籠制作体験も実施しました。

西条農業高校３年生（棚田チーム）

安永 拓海（たくみ）さん　越智 大心（たいしん）さん　藤本 和季（かずき）さん　髙橋 幸晟（こうせい）さん

将来へつないでいくために

保全活動を続けていく中で、協力してくれる「人」が必要不可欠だと感じた棚田チーム。今年の目標は、ライトアップイベントなどに向けて草刈りイベント（詳細は9ページ）を行うこと。「あっという間に草が生えるので、皆さんの協力が必要」と越智さん。今後はイベントの詳細を考え、広報活動も行う予定です。

卒業後は進学と就職とそれぞれの道を歩む4人。進学する髙橋さんは「農業教員を目指しているので、農業の知識を深めていきたい。理想は成髙先生の後を継ぐことができれば。ぼくらが続けてきた活動を次の世代につなぎたい」。また、就職する藤本和季さんは「市内で就職するので、社会人になっても棚田とかに来れる環境。先輩も休日とかに来てくれているので、自分もそうしたい」と話します。

成髙さんの理想「後世へつなぐ」。それぞれ関わり方は違いますが、卒業生を含め、次の世代へその思いは受け継がれていきます。棚田チームはこれからも保全活動などを通して、棚田の魅力を発信し続けていきます。

●卒業後も棚田をサポート！

伊藤 誉司史（よしふみ）さん　曽我 優斗（ゆうと）さん

これからも棚田を守りたい！

昨年、西条農業高校を卒業したＯＢも棚田の保全活動に取り組んでいます。市内企業で働く曽我優斗さんは「やっぱり高齢者が多くて、自分たちみたいな若い人間が積極的に活動していかないと、棚田がなくなってしてしまう」と、学生時代の経験を通じて千町が特別な場所だと感じたからこそ、休日になると成髙先生の誘いで作業を手伝います。ほぼ毎週訪れている伊藤さんは「兼業農家を目指していて、将来的には棚田と祖父母が持っている両方の土地を守りたい」と話します。

後輩たちのサポートもする２人は「成髙先生や山内さんたちと一緒に作業して『ここを守りたい』という思いが強くなった。僕たちや後輩など、若い世代が活動することで、多くの人に千町棚田を知ってもらい、活動する人を増やしたい」と意気込みます。

●西条高校×京都大学も活動！

西条高校では、京都大学大学院地球環境学堂（地域資源計画論研究室）と連携し「サイエンスキャンプ」を2019年から実施。フィールドワークで千町地区を訪れ、地域にある資源を活用した持続的な地域社会の発展のあり方を考えています。2020年には放置竹林を活用したバンブーグリーンハウス（農業用ハウス）を建設し、研究なども行っています。

「関心人口」を増やし、数十年後も輝く棚田へ

まちの誇りを未来へつなぐ。そのためには何が必要なのでしょうか。
棚田を専門に研究などを行う、山路永司さんにお話を伺いました。

全国の棚田を見てみると、東日本の多くは土で、西日本の多くは石垣で作られています。石垣は手間が掛かりますが、広い水田面積が取れるのがメリット。千町の棚田の第一印象は石垣の積み方がものすごく個性的で立派だなと。全国の棚田を何箇所も見ていますが、地域ごとにだいたい同じ積み方をしています。千町の場合は、積んだ農家の個性が表れていて、見え方が違うけれど、それぞれきれいですね。まさに先人たちの知恵であり、魅力的な部分です。

全国の水田の約1割が棚田といわれていますが、そのうち4分の1が耕作されていません。棚田を守るには、まずは関心人口を増やすこと。興味を持ってもらうことが大切です。例えば、フットパス（散歩道）を作るのも一つの手段。行くきっかけというか、選択肢を増やすことで、まずは一回訪れてそこから興味を持ってもらい、お米作りに参加したり、イベントに参加したりなど、活動に関わってもらう。住むことだけが守ることではないので、訪れること、関心を持つことが、つなぐために必要です。地元の誇りでもある千町の棚田。10年後、20年後、今よりもさらに元気な棚田であってほしいと思います。

▲千町の棚田を訪れ高校生たちとも交流

山路 永司（えいじ）さん
西条市上神拝出身。東京大学名誉教授・棚田学会会長。イベントやシンポジウムなどを通じて棚田保全をサポート。

棚田を未来へつなぐために

千町自治会長
伊藤 友之（ともゆき）さん

僕ら子どもの時やと、70年も前くらいだけど、稲刈りをする時期はもう見渡す限り、黄金色（こがねいろ）やった。田んぼが2,500枚ぐらいあったかな。でも、年数を重ねるごとに、人も風景も変わっていった。住民もよけおったけど、今は10人くらい。

ここ千町での経験は子どもたちにとっても、きっと特別なものになると思うので、僕も活動に参加したいけど、体調の関係もあって今は応援する立場。NPOとか大学とか銀行とか、いろんな団体がそれぞれ活動しているので、自治会長として住民の間に立って見守っていきたい。

全部を戻すことは不可能ですが、いろんな人が関わって、少しでも活気のある千町地区でありたいですね。

棚田のこと、もうちょっと知ってみませんか？

うちぬきフェスティバル

日時　12月10日(日)　10時～14時
場所　西条図書館北側中央緑地

NPO法人うちぬき21プロジェクト主催イベント。棚田米の販売や竹灯籠製作体験などを実施。そのほか、抽選会やマルシェ、フリーマーケットも。

西農生「草刈りイベント」

日時　1月27日(土)　9時30分～13時
場所　千町の棚田

ライトアップイベントに向けた西条農業高校棚田チーム考案のイベント。内容などは未定。参加希望の方は電話にて受付中。
TEL090－4504－2391（成髙）

ライトアップイベント

期間　2月24日～3月16日までの毎週土曜日　18時～

今年で4回目を迎えるイベント。約300個の竹灯籠が石垣に並び、千町の棚田を彩ります。

棚田・段畑HP「愛媛のたなだん」

棚田・段畑についての解説のほか、県内の棚田の紹介も。棚田の魅力を詰め込んだホームページです。年度内には千町の棚田のプロモーション動画も公開予定。

えひめの棚田・段畑サポーター

えひめ景観シンポジウム2023

11月2日に「千町の棚田」をテーマに西条市で開催されたシンポジウム。今特集で登場した山路さんや成髙さん、山内さん、西条農業高校生などの講演の様子が動画で見れます（11月中公開予定）